

2020. 9. 20 (日) マタイ 22 : 34 ~ 40

**22:34** パリサイ人たちはイエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、一緒に集まった。

**22:35** そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。

**22:36** 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」

**22:37** イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

**22:38** これが、重要な第一の戒めです。

**22:39** 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。

**22:40** この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

<説教>

「あなたがたは聖書も神の力も知らないのです、思い違いをしています。…死人の復活については、神があなたがたにこう語られたのを読んだことがないのですか。…神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です」(22:29-31)

イエスはこう言って、復活はないと主張していた「サドカイ人たちを黙らせ」ました。

『やっぱりサドカイ人たちにはイエスに対抗するだけの聖書知識も神知識もなく、知恵もなかった。それに比べて自分たちは聖書も神の力も知っているし知恵もある。』

そんな優越感や誇りをパリサイ人たちは抱いたことでしょう。

サドカイ人たちがイエスによって黙らされたことは痛快だったのですが、イエスの教えにユダヤ人の群衆が「驚嘆した(驚き感心した、非常に感心した)」(33)ことはまたパリサイ人たちは不愉快にもなったようです。

パリサイ人たちはまた一緒に集まり、何やら相談を始めました。

**22:34** パリサイ人たちはイエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、一緒に集まった。

**22:35** そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。

マルコの福音書(12章)ではこの「彼らのうちの一人、律法の専門家」個人はそんなにイエスに悪意を抱いているようには見えません(むしろイエスに対して賢い答えをし、「神の国から遠くない。」と仰っていただいたほどでした)。

とはいえやはり「一緒に集まった」パリサイ人たちの動機は不純で陰険なものでした。

**22:36** 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」

**22:37** イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

**22:38** これが、重要な第一の戒めです。

もちろんパリサイ人、「律法の専門家」にはこの「戒め」が、「聞け、イスラエルよ。(シエマ、イスラエル)」(申命記 6:4a)で始まる有名な(ユダヤ人なら幼いときからたたき込

まれてだれでも知っている) 命令であることはすぐに分かりました。

「主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」(申命記 6:4b-5)と続くものです。

「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」、モーセを召し、イスラエルの民をエジプトの奴隷から解放してくださった神を「私たちの神」「あなたの神、主」として愛しなさい。

「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして」、即ち、口先だけでなく心から、たましいとからだをもって、全身全霊をもって、全存在をかけて、「神と富とに仕える」(マタイ 6:24)ような二心(ふたごころ)でなく、全き誠実・忠実・熱心を傾けてあなたの神、主を愛しなさい、と言われたのです。

愛するということは大事にする、大切にすることです。

唯一真の神を崇め、賛美し、礼拝し、仕え、祈り、神の聖なる御意思(みこころ)を知るところを求め、知らされたみこころに服従することを何よりも大事に、第一とする。

そのために知性も理性も全てを用い、働かせる。

いやいやながらでなく、強制されてでもなく、喜びと感謝をもって進んでそうする、そうしないではいられない生活が「神、主を愛」する生き方です。

さてそれにしてもパリサイ人たちもこの「神、主を愛」する熱心と実践(行い)においては自分たちこそ一番だと自負して誇っていたのでした。

そしてイエスの目には「自分たちの言い伝えのために神の戒めを破」(マタイ 15:3)っており「自分たちの言い伝えのために神のことばを無にして」(15:6)いたのでした。

そのようにして彼らは実は(神の目には)全然「神、主を愛」していませんでした。

むしろ律法の行いを熱心に行っている自分自身を愛していたと書いていいでしょう。

そして自分たちより他の民衆・群衆を、自分たちのような神への大きな信仰、愛、熱心のない「アム・ハー・アーレツ」(直訳すれば「土人」という今では立派な差別用語です)と言って差別し、見下していました。

それでイエスはすぐに続けて全く同じように重要な戒めを彼らにお示しになりました。

**22:39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。**

**22:40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」**

「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」とは、「あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。」(レビ記 19:18)からです。

また同じくレビ記 19:34にも「あなたがたとともにいる寄留者は、あなたがたにとって、自分たちの国で生まれた一人のようにしなければならない。あなたはその人を自分自身のように愛さなければならない。あなたがたも、かつてエジプトの地では寄留の民だったからである。わたしはあなたがたの神、主である。」とも書かれています。

「第二」と言っても、それは第一に続く第二という順序というよりむしろここでイエスが言っておられる大事なことは、その「重要」さは「同じ」だということです。

「**律法と預言者の全体**」とは聖書全体ということですから、「この二つの戒め」はもはや別々のものではない、二つではない、一つだとイエスは言われたのです。

だから、「自分の神を愛することはするけれども自分の隣人を愛することはしない（できない）」とか「自分の神は愛していないけれども自分の隣人を愛することだけはしている」とかいうこと（言い訳？言い逃れ？）は神の前には通用しないのです。

イエスは結婚について「もはやふたりではなく一体なのです。…神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません」（19:6）と言われましたが、そんな”一体性”と同じと言って良いと思います。

「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛」することと、「あなたの隣人を自分自身のように愛」することとを「人が引き離してはなりません」。

もちろんイエスはここで「自分自身を愛する」こと自体を手放して良しとなさったのではないことは言うまでもありません。

私たち人間が生まれながらに持っているところの「自分自身を愛する」、「自分自身を大事にする」、「いまだかつて自分の身を憎んだ者はいない。むしろそれを養い育てる」（エペソ 5:29）、「何とか自分だけは生き延びようと必死に願ひ務める」のと同じ熱心さ、真剣さ、切実さで「あなたの隣人を愛しなさい」と言われたのです。

「あなたの隣人」はあなたと全く同じように「神のかたちとして」神によって造られた人だからです。

それゆえ「自分自身」以上でも「自分自身」以下でもないからです。

「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして」愛すべき「あなたの神、主」が同時に「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」とお命じになったのですから、この「二つの戒め」は引き離すことはできず（してはならず）「同じように重要」なのです。

使徒パウロは、「律法全体は、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という一つのことで全うされるのです。」（ガラテヤ 5:14）とさえ言っています。

そして使徒ヨハネも言います。

「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は兄弟も愛すべきです。私たちはこの命令を神から受けています。」（Iヨハネ 4:20-21）と。

さて、それにしても神の命令通りに神を愛する愛、そして隣人を愛する愛が私たち罪深い人間のうちに生まれながらにあるはずも全くありません。

そのような二つの（そして同時に一つの）愛は、実は神の愛を、愛の神を知って信じる者に神が与えてくださるのです。

そしてそんな神の愛、愛の神を私たちが知るのには、イエス・キリストによって、イエス・キリストのみことばとみわざを通してなのです。

先ほど触れた使徒ヨハネは先ほどの箇所ですぐ前ではこう言っています。

「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちに愛して下さったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです。」（Iヨハネ 4:9-11）